

2. ラオス・ビエンチャン

在ラオス日本国大使館 プリーフィング・レセプション

日 時： 2002年5月28日(火) 午後5時00分～ 現地事情プリーフィング
午後6時30分～ レセプション

場 所： 大使公邸

出席者： 橋本 逸男駐ラオス特命全権大使 他
団員14名

橋本大使：

ラオスでは法律を作っても適正に施行できていない面がある。経済面では、タイバーツと密接な関係にある。国の財政は赤字で、金融制度は十分整備されているとは言い難い。

労働人口の8割は農業従事者で、産業の半分は農業。あとは工業とサービスが半々。労働者の性格は、素直な人が多く、きちんと教育するといいい人材を育成することができる。

ラオスは観光を推進している。もうすぐ、JALが日本から、ハノイ経由でビエンチャンへ就航する予定。

日本は最大の援助国である。貿易で日本の市場への進出は難しいが、日本でベトナムコーヒーを販売する店が出てきたので、ラオスのコーヒーも有名なのでなんとか活かせればと思う。

日本へ技能研修生を派遣するため、JITCO(財団法人国際研修協力機構)とは6年前に合意がなされている。ラオスは研修生を送りたいと考えているが、ラオス政府は自ら受け入れ企業を探す必要があるため、なかなか軌道に乗っておらず、頼れる人(資源)探しに必死である。

日本語熱が上がっており、民間の日本語学校もある。

明日視察する東京コイルエンジニアリング社は、中国、タイにも工場あり、ラオスでは、外資導入の模範となっている。近くにホンダの工場もある。

トンルン副首相兼協力計画委員会委員長との会談

日 時： 2002年5月29日(水) 午前8時～8時45分

場 所： 協力計画委員会

出席者： トンルン副首相、橋本大使 他
団員15名

堀田団長：

大阪はアジアのゲート。アジアとの貿易量では関西は他の地域より10%高い。大阪にはパイオニア精神が育まれており、松下、ダイエーなど多くの有名企業が生まれた土地である。団員に

は、アジアで成功している企業もある。もっと、早くラオスを訪問すべきだったと思っている。

トンルン副首相：

今回の訪問を歓迎する。本日視察団に会うことを楽しみにしていたために無理して時間を作った。この訪問がラオスと日本の友好関係につながればと思う。最近、観光、ボランティア等の目的でラオスに来る日本人が増えたが、良好な関係にある証拠と認識している。

堀田団長：

大阪、京都がある関西にぜひ来てほしい。関西財界と話ができる機会も作りたい。

トンルン副首相：

今年3月に日本を訪問したが、東京だけの訪問だった。日本の知人からは中小企業を大切にと言われた。ラオスにとって電力ビジネスは重要と認識しており、JICAとともにサバナケットで調査をしている。ラオスの国土は広く、土もよく、野菜はすぐ栽培でき、化学肥料はいらない。資源も沢山ある。

堀田団長：

野菜の有機栽培は日本でブームであり、中国からも輸入している。化学肥料を使わない栽培は良いアイデアで、鶏もブロイラーより、放し飼いがおいしいのと同じだ。

トンルン副首相：

昔の日本の鶏がまだラオスにいるのかもしれない。ラオスには技術、資本、マーケットが必要。ラオス産品の中でも、シルク、コットンは品質が良いので日本で人気が出るだろう。少し高くても売れるのではないかと考えている。海外からの投資を歓迎している分野は、電気製品の部品組み立て工場、テレビ、ラジオ部品工場である。電力ビジネスでは、電力の輸出が可能であり、タイには既に輸出しており、今後はベトナム、カンボジアも視野に入れている。

堀田団長：

ベトナムで見学したアマタ工業団地は、政府がインフラ整備（電力、道路）に協力している。ラオス政府も小規模でも工業団地を作って、日本企業を呼ぶのが手っ取り早いのでは。

ラオスの繊維、絹は高価で、少量生産。日本人は安い大量生産製品に飽きがきている。ラオス独特の絹製品は日本人に受け入れられると思う。

トンルン副首相：

投資を考えている人がいたら連絡してほしい。また問題があれば教えてほしい。

堀田団長：

インドの場合でも、15年前から大阪で商品展示会を開催するようになり、ここ10年でいろいろな面で進歩した。また中国との競争は、値段ではなく、品質や独自性で対抗することも大切。

トンルン副首相：

日本の市場にはラオスのシルクが有望だろう。手づくりで、天然製品であるところが魅力。これらを活かしたビジネスに日本から申請があれば、すぐに許可する。専門家も送りたい。

ブンニャン首相との会談

日時： 2002年5月29日（水） 午前9時～9時30分

場所： 首相府

出席者： ブンニャン首相、橋本大使 他

団員15名

ブンニャン首相：

先の日本訪問の際は、大歓迎していただき感謝している。

東京の国際会議では、ラオス経済の長期計画について報告した。日本はきれいな国だった。そして、日本人は一生懸命働いていた。日本とラオスとの関係が密になることを望む。日本からの援助は最大であり、ラオス経済、社会の発展に大きな役割を果たしている。

堀田団長：

中小企業は日本経済の原動力。中小企業を無視しては、日本経済は成り立たない。日本の中小企業はアセアンへ進出した方が成功すると思う。先ほど副首相には、インフラが整っていないと企業を呼ぶのは難しいと申し上げた。

繊維製品、絹はラオス独特のものがある。ラオス商品の値段は高いが、日本人は高価で珍しいものに惹かれ出したので、日本市場に合うと思う。日本市場への進出は時間がかかるが、一旦認められるとずっと安定して売れる傾向がある。

ベトナムが好景気である理由は、アメリカとの関係が良くなり、また関税が下がったのも大きい。その点ラオスは制限がないので可能性が高い。

東京のみの訪問は残念。次回はぜひ大阪に来ていただきたい。関西からアジアへの輸出は日本の他地域より10%高い。大阪がアジアに関心が高い証拠である。

橋本大使：

大阪を中心とする経済圏は東京を中心とする規模より大きい。多くの企業は大阪が発祥地であり銀行、商社もしかり。中小企業も多く、関西経済は活発である。

ブンニャン首相：

機会があれば大阪を訪問したい。今回の視察団の訪問が短期間であるのは残念。

ラオス商工会議所幹部との会談

日 時： 2002年5月29日（水） 午前11時～正午

場 所： ラオス商工会議所

出席者： キッサナ会頭、ウデト議員 他
団員15名

堀田団長：

副首相と午前8時に会ったが、あんな早い時間に公式訪問するのは初めて。忙しいのでその時間になったと伺った。頼もしく思った。この心構えならラオスは発展すると思った。

まずはインフラの整備が大切。その最たるものは、電力と交通網の整備。ラオスと日本の両政府が話し合い、徐々に整備を進めれば日本企業は自ずと来ると副首相に伝えた。

発展途上国で推進しやすい産業は農水産業、繊維。繊維の場合は中国が圧倒的なシェアを持っているので、中国とまともに競争するのではなく、ラオス特有の商品に力を入れるべきだ。それに対しては副首相も同感だった。

“ニコン”という手織り工場を見学した。草花からの染料を使い、品質の高い製品が作られていた。私は、購入した製品を大阪の中小企業の方に見せ、化学染料を使わないラオスの製品のブランドを作って売れば良いとアドバイスしたい。

首相にはぜひ大阪に来てほしいと伝えた。インフラを整備して日本企業に来てもらえるように整備してほしいとも要望した。

キッサナ会頭：

今回の訪問を感謝する。日本国民からの援助に感謝したい。商工会議所は1989年設立され、まだ経験が浅く、勉強しないといけない。会員850名で11グループに分かれている。

インフラの整備の必要性については同感。“ニコン”は天然資源を使用しており、輸出も考えている。日本への販売方法、宣伝方法を教えてほしい。繊維以外では、観光に力を入れたい。

伊藤副団長：

アセアン地域の中で政治・経済情報が一番不足しているのがラオス。日本側も情報収集に努め

る必要がある。収集した情報を日本側に提供するの今回の訪問目的のひとつ。

わが社はタイに現地法人があり、流通・販売を行っているが、ラオスとの交流も活発にしたいと考えている。今後活発に交流できることを願っている。

東松団員：

第一印象は穏やかな国。観光に力を入れることはいいこと。機械的なマスプロダクションが盛んな中、“ニコン”で手織りの製品を見ると、手工業の大切さを実感した。これから求められる製品であると感じた。

発展するために電力は大切であるが、水量が豊富だから水力発電に力を入れるのは理解できるが、水力発電はキロワット当たりのコストが非常に高い。今後の発展に期待する。

ウデト議員：

電力は水力に頼っており、たくさんのプロジェクトがある。

池田顧問：

産業を発展させるには、もっと情報交換が大切。ラオスにいるJICAの専門家やIBOシンガポール事務所を活用して欲しい。

ウデト議員：

ラオスは、古い文化と自然が豊富で、山と川の国。観光資源がたくさんあるが宣伝されていない。21ヵ所の植林エリアがあり、そこが観光地となるように考えている。自然が豊富でも、インフラが整備されていないため効果がないことを理解している。

日本人をラオスへ呼ぶ方法を知りたい。都会から離れた人とか、自然の中でリラックスしたい人は、日本にたくさんいるであろう。世界遺産のルアンパバーン、ワット・プーを宣伝したい。

団が見学した“ニコン”は小さい店だが、それ以外に繊維製品、民族衣装などを扱っているのは60店ある。

堀田団長：

団体間の業務提携は、お互いが熱意を持って接しないと上手くいかない。交流がないと何も生まれない。今後課題を見つけて両団体で話をするのが大切である。

ウデト議員：

今回の訪問が交流のスタートと思っている。ラオスのこれからの発展に協力してほしい。

東京コイルエンジニアリング(ラオス)社工場訪問

日 時： 2002年5月29日(水)午後1時30分～2時30分
場 所： 東京エンジニアリング(ラオス)社
出席者： ヨドサーン工場長、相原トレーディング・マネジャー(タイ工場)
団員15名

<会社の概要>

創業 : 1997年12月30日 設立 : 1999年10月18日
資本金 : 120万USドル(100%出資)
敷地面積 : 10,002 m² 工場面積 : 1,000 m²
従業員 : 236名(2002年5月) ラインワーカー 220名
主な生産品 : カメラのストロボ用 trigger coil(コイル)
輸出先 : タイ、日本
原材料 : 日本、タイ、中国

<工場設立>

設立許可を得るのに2カ月かかった。売上はタイパーツとUSドルで持っており、ラオスの銀行に口座を持っている。設備にかかる輸入関税は、輸入価格の1%を支払う必要あり。加工及び再輸出を目的としている原材料と中間財は税が免除される。輸出される全ての完成品の輸出税も免除されている。

<ラオス進出理由>

当時、アセアン諸国を消去法で検討した結果がラオスであった。前提として日本人はコストがかかるので置かないという考えでいた。言葉の問題はタイ人の工場長を雇うことで解消。しかも女性なので、安全性からこの従業員をほぼすべて女性にすることも考慮した。

<タイの工場>

設立から11年経っており、技術力が求められる複雑なものを作っている。

相原氏：

投資は4～5年で元を取ろうとすると失敗する。

タイ工場同様、女性従業員中心で、男性は機械関係と運転手のみ。タイ工場を作った時からラオス進出を考えていた。タイでは日本人が2名いる。完成品はタイにトラックで輸送し、輸出はタイ経由で行っている。

就業時間は午前7時半から午後5時半。創業当初は結婚退職もあったが、今は結婚後子供が生

まれるまで勤務するようになった。またこの工場内からは外が見えないので、半日で辞める人もいた。タイのチェンマイにも工場があり、採用後はそこで3カ月研修した後、ラオスの工場で更に3カ月試用期間を設けている。工場勤務を始めると女性たちの顔つきが変わってくる。ラオスでは女性に教育は要らないという考え方があるようで、働くことにより早くから家計を助けるという役目を負っている。